



Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	身体としての体育教師：メルロ＝ポンティの身体論に基づく体育教師論再考(論文要旨)
Author(s)	坂本,拓弥
Citation	
Issue Date	2016-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2309/147068
Publisher	
Rights	

氏 名 : 坂本 拓弥
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博乙第 82 号
学位授与年月日 : 平成 28 年 3 月 15 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 2 項該当 論文博士
学位論文名 : 身体としての体育教師 : メルロ＝ポンティの身体論に基づく体育教師論
再考
論文審査委員 : (主査) 教授 瀧澤 文雄
(副査) 教授 海老原 修 教授 長澤 成次
教授 鈴木 秀人 教授 伏見 陽児

学位論文要旨

本研究の目的は、体育教師をメルロ＝ポンティの身体論から捉え直し、〈身体としての体育教師〉という体育教師の在り方を明示し、これによって体育教師論における新たな論点を提示することである。本研究が方法的な視点として採用するメルロ＝ポンティの身体論は、身体に対する従来の心身二元論的な理解を批判的に乗り越え、身体を主体として捉えることによって、人間が生きる中で不可欠な身体の働きを示すものである。この身体論に基づくことによって、〈身体としての体育教師〉という新たな在り方が明らかになると考えられる。

第 1 章および第 2 章では、はじめに教師論等の関連する諸領域の先行研究を概観し、その上で、体育教師の変遷、および、今日の体育教師論における主要な論点を確認した。そこでは、今日の体育教師論が、実証科学的な方法を用いて体育教師の指導技術を検討していることが明らかにされた。そのような実証科学的な方法については、体育教師と児童・生徒との関係を数値的な因果関係として捉えているという問題点が指摘された。この問題点を批判的に検討した結果、数値的に捉えられる体育教師と児童・生徒との関係は、より根源的な生きられた世界における関係に支えられており、その根源的な関係においては体育教師の身体が不可欠の役割を担っていることが示された。また、その根源的な関係とそこにおける体育教師の身体は、現象学的な視点から捉える必要があることが明らかにされた。

第 3 章では、そのような根源的な関係を担う体育教師の身体を探求するために、その方法的な視点を検討した。前章で現象学的視点の必要性が指摘されたことを踏まえ、現象学的身体論という視点が研究方法として持つ意義を提示することを試みた。具体的には、まず、フッサールとハイデガーそれぞれによる身体に関する論述を検討し、現象学的身体論という視点がどのような特徴を有するのかを明確にした。その上で、彼らの議論を批判的に受け継ぎ、それを独創的に展開したメルロ＝ポンティの身体論を検討した。これによって、メルロ＝ポンティの身体論という視点から、体育教師の文化や言語を身体における事柄として論じる必要性が示された。

第4章では、メルロ＝ポンティの身体論に基づいて体育教師論を再考する第1段階として、体育教師を体育教師たらしめている1つの典型的な事柄、すなわち〈体育教師らしさ〉に着目し、その身体化の過程を検討した。〈体育教師らしさ〉は、従来、体育教師に対して児童・生徒らが持つイメージとして捉えられてきたものであり、そのイメージは体育教師の身振りやしぐさといった身体文化の影響を受けて形成されている。したがって、〈体育教師らしさ〉の形成過程を明らかにすることは、体育教師が無自覚的に児童・生徒に影響を与えているという事象を解明するための、新たな視点を体育教師論に提示することになる。具体的には、体育教師の身体文化の一例として体罰に着目し、それが習慣として体育教師によって身体化されていく過程を明示した。

第5章では、そのように体育教師に身体化されていく文化として、指導言語に焦点を合わせ、言語を身体的所作として捉えているメルロ＝ポンティの身体的な言語論から、先行研究を批判的に検討した。先行研究において指導言語は、体育教師の意図を児童・生徒に伝えるための記号的なメッセージとして捉えられてきた。しかし、そのように一義的な記号としてのみ指導言語を理解することは、同じ指導言語を用いてもなぜ異なる結果が生じるのかという問いに答えることを困難にしている。メルロ＝ポンティは、そのような一義的な記号としての言語観に対して、新たな意味を創り出していく力動的なことばの在り方をより重要視し、そのことばを身体的所作として論じている。このことから、体育教師が体育授業で児童・生徒を前にして発する指導言語は、それが身体的所作であるがゆえに、〈ふれる〉という在り方で児童・生徒に届くことが明らかにされた。さらに、この身体的所作としての指導言語の在り方が、記号的なメッセージが有効になるための基盤となることが示された。

第6章では、前章までに明らかにされた体育教師にとっての身体のはたらきを踏まえ、〈身体としての体育教師〉が体育授業を生きているということ、すなわち体育教師の実存の問題を検討した。ここで実存に着目するのは、今日の体育教師論において体育教師の専門性が指導技術に偏って捉えられていることに対する批判であり、それは体育教師が児童・生徒とともに体育授業に生きていることそのものの肯定的な意味を見出すためである。具体的には、教師の実存的な危機としての「燃え尽き」に関する先行研究の検討から、生きられた世界としての体育授業における身体の実存性について、メルロ＝ポンティに加えてフッサールとハイデガーの議論を交えて検討した。その結果、体育授業という世界に体育教師が身体として住み込んでいること、身体的な指導言語の空間性が体育教師の身体的な実存を充実させていること、そして、体育教師の〈怒り〉が児童・生徒との実存的な交流としてなされていることが明らかにされた。

以上の検討から、体育教師が体育授業という世界において身体として存在していること、すなわち、〈身体としての体育教師〉として在ることが明らかにされた。このことは、今日の体育教師論に〈身体としての体育教師〉という新たな問題領域を提示するだけでなく、体育教師の身体についてのさらなる議論の必要性を示すものと言えよう。